
コーヒーブレイク

花菱美希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コーヒーブレイク

【Nコード】

N4544G

【作者名】

花菱美希

【あらすじ】

真夜中だというのに、ひどくコーヒーが飲みたくなった。こなたに教わった珠玉のコーヒー。あなたもおひとつ、いかがですか？

第一話：モカ

真夜中だというのに、ひどくコーヒーが飲みたくなった。

私の部屋からキッチンに向かうためには階段を降りなければならぬ。築二十年にもなるうかという家の階段はかなりガタが来ていて、一步踏み出すごとにぎしぎしと嫌な音を立てる。幸い向かいの部屋で眠っているはずのつかさが起きる可能性は限りなくゼロに近いけど、物音に敏感な母をはじめとする他の家族を起こしてしまう恐れがないわけじゃない。だから私は、不必要に騒がしくならぬようにと、慎重に歩みを進めた。

キッチンは暗く、空気はうそ冷たくて、そのうえわずかに濁っていた。もちろん人の気配などあるはずもない。冷蔵庫のかすかな動作音だけが妙に耳に響いてくる。小さい頃はその暗闇に何か潜んでいるのではないかと怯えたものだが、さすがに今はそんなことはなかった。

窓からわずかに差し込んでくる街路灯のほの暗い灯火だけを頼りに、半ば手さぐりでキッチンライトのスイッチを指だけで引く。ぱちんという音と共に、ライトが二、三度またたいて点灯する。冷え冷えとした青白い蛍光灯の光が、シンクの周りだけを暗闇から浮かび上がらせた。

食器棚から自分のコーヒーカップを取り出し、水を一杯汲んでやかに注ぐ。それをガスコンロにそっと置いてから、つまみをいっぱいにひねる。かちんという固い音がして、ぼうつと青い炎が盛大に噴き出す。もちろんそのままではやかんの取っ手が溶けてしまい

かねないから、再びつまみを操作して適当な火力に調整し直しておく。

それからシンク直上の収納庫の扉をそつと開け、私専用のコーヒーセット一式を取り出した。といっても別に大したものじゃない。茶色のペーパーフィルターとレギュラーコーヒーの入った袋、そして陶器製の白いコーヒードリッパー、だ。

ドリッパーとコーヒーの粉は、こなたに譲ってもらったものだ。レギュラーコーヒーというのはサイフォンみたいな大掛かりな道具が必要だと信じていたのだが、一人分くらいならドリッパーで淹れるという方法もあるのだと教わった。そして袋に入っているのはモカのシテイロースト。あいつの話によると、これが日本ではもっとも一般的らしい。

『まずは定番を押さえて、そこから徐々に自分の味を開拓していけばいいと思う』

脳裏にあいつのニヨニヨ顔が浮かぶ。まったく、自分のこだわることになると、とたんに饒舌になるんだから。

そもそも、とりたててコーヒー好きというわけではない私が、なぜレギュラーコーヒーの味をしめてしまったかという点、あいつのあの一言が実はかなり痛烈に影響している。

『コーヒーはね、ダイエット効果もあるんだヨ』

その時はなんか眉唾だなと感じたが、あいつに勧められるままに道具をそろえ、何日か飲み続けているうちにすっかりハマってしまった。なんとなくあいつに踊らされているようで気にいらぬのだ

が、確かに手間隙かけて淹れたレギュラーコーヒーの味は、インスタントのそれとは比較にならない、という事実だけは認めよう。

そんなことを考えながら、ドリッパにペーパーフィルタの端を交互に折ってセットし、そこに一杯分のコーヒーの粉をスプーンですくって入れる。蛍光灯の光を反射してキラキラと輝く純銀製の専用計量スプーンは、ちょうど一杯がコーヒー一人分にあたるという優れものだ。

『これなら不器用なかがみんでも、計り間違える可能性が減るしネ』

ああ、もうっ。いちいち人の脳内にまで沸いてきてツツコミいれんな。

ほどなく、やかんが盛大に湯気が吐き出し始める。コン口の火を止め、一度は沸騰したお湯を、泡が出なくなるまで落ち着かせる。それから火傷しないように気をつけながら、オーブンミトンを手にはめて、やかんの取っ手を掴む。ただしここで焦って、いきなりお湯をどばどば注いではいけない。コーヒーの風味を百パーセント引き出すにはコツがあるのだ。

『コーヒーの粉はね、三十秒くらい蒸らすと、ぶわっつと膨らんで味が出やすくなるんだヨ』

またもや脳内に出現したあいつが、いらんアドバイスを送ってくる。

「はいはい、わかってますよ」

軽く応じながらお湯を少しだけ注ぐと、キッチン全体にレギュラーコーヒー特有の香ばしい香りが立ち込めていく。これもまたインスタントコーヒーでは味わえない魅力のひとつだ。

キッチンタイマーでかつきり三十秒を測り終えてから、さきほど注いだ時の泡が消えないうちに、残りのお湯をドリッパ上で円を描くように注いでいく。これが一番むずかしい。大量に注ぐとフィルターに張り付いた粉の壁が崩れ、コーヒー成分を均一に抽出できなくなる。逆に量が少なすぎるとお湯が途切れてしまい、香りが逃げてしまう。

「よしっ」

今回はなかなかうまくいった。フィルターの内側にコーヒーの粉が綺麗に張り付き、まるで噴火口みたいな様相を見せている。思わず小さなガッツポーズまで取ってしまう。やれやれ、こんな所はとも他人様には見せられないな。特に、あいつには。何を言われるか知れたもんじゃない。

さっそく淹れ立てのコーヒーを一口含む。わずかに苦味のある、しかし独特の風味がブレンドされた液体が口の中に広がっていく。いつの間にか冷えてしまっていた身体まで、ほのかに温められていくような感触を覚える。

「おいしいよ、こなた」

暗闇の中から一瞬、あいつの笑顔が浮かんで見えたような気がした。

第一話：モカ（後書き）

お読みくださいますありがとうございます。

第二話「ブレンド」は3月29日掲載の予定です。

第二話・ブレンド

「ここなの？ こなたのお勧めの店ってのは」
「そぞ。我が家だと思ってくつろいでくれたまへー」
「そういう台詞は自分の家で吐くもんじゃないのか」
「細かいことは気にしない。ささっ、どぞー」

古ぼけた木製の頑丈そうなドアをこなたが開けると、カランコロ
ンと涼やかなベルが鳴った。

「こんちやー、マスター。また来たよー」
「失礼しまーす」

一歩入って戸惑いを覚える。外の明るさに慣れた目には、店の室
内は少し暗すぎた。目をしばたきながら何秒か待つと、しだいに暗
さに目が慣れてくる。

私たちの入った店は、今にも息が詰まるのではないかと思うくら
い狭かった。二人がけの席がみつと、四人がけの小さなカウンタ
ーがあるだけ。壁は古ぼけた無数のポスターで隙間なく埋め尽くさ
れている。それを照らし出しているのは、十九世紀を連想させる小
さなランプ。外の寒さを忘れさせてくれる暖かな空気がとても心地
いい。一歩踏み出すごとに、木製の床が私の体重を受け、かすかな
悲鳴をあげるのが聞こえた。

ほんのりとコーヒーの香りが部屋を満たしていることに気づく。

優しい、しかしどこか物悲しい音楽が不思議に雰囲気にもマッチしている。そして、なにかしら人生を感じさせる初老のマスターが、無言の会釈で私たちを迎えてくれた。ぱつと見、私たちのほかに客は誰もいないようだ。

いつの間にか、こなたが一番奥の席をキープしていて、私のことを「ほれほれ」と手招きしていた。

「ここがこの店の特等席なんだよ」

「そうか？ どこに座ってもあまり代わりないような気もするんだが」

「そのうちわかるって」

いつものニマニマ顔で、こなたは答える。

「じゃ、そゆことで。マスター、ブレンドふたつー」

黙々とコップを磨いていたマスターは、こなたの注文を聞くなりそれを置き、手馴れた手つきで棚からコーヒーカップとソーサーを2セット取り出し、準備に取り掛かったようだった。

「あのマスター、ちょっといいわね。なんか仕事一筋って感じで」

「ほほー、かがみんはオジサマが好みと」

「なんでもそういう方向に話を持っていくなっ」

軽く睨みつけてみるが、こなたは意に介した様子はない。

「くふふ。まあいいか。かがみには残念だろうケド、ここのマスタ

ーはね、男の人が好きなんだよ」

「……えっと、それってつまり、ゲイってこと？」

「そそ」

「マジですか」

「マジですよ」

「へー」

無礼な仕草だということも忘れ、まじまじとマスターのことを見

てしまう。

「世間にそういう人がいるって、噂には聞いてたけど、本物を見るのは初めてだわ」

「かがみい、そういう好奇と偏見に満ちた視線はいくないねー」

「……ん、そうね。なんか悪かった」

こればかりは、こいつの言い分のほうが正しい。興味本位な目で見つめてしまったことを反省する。それで満足したのか、こなたはさっさと別の話題を振ってきた。

「そういえば、かがみは今流れてるこの曲は知ってる？」

「えっ……さあ、知らないけど。ここに入ってきたときから思ってたんだけど、なかなか感じのいい曲よね」

「んー、これは戦メリ、だよ」

「戦メリ？」

聞き覚えのない単語だ。思わず私は首を傾げてしまう。

「『戦場のメリークリスマス』。八〇年代の戦争映画だよ。そのメインテーマ」

「私たちの生まれる前の話じゃない。なんでそんな事まで知ってるんだ」

「このくらい常識……と言いたい所だけど、残念ながらマスターの受け売り」

「そういうことじゃないかと思った。あんたが詳しいのって、アニメと特撮だけだもんね」

「いやいやかがみ、私はネトゲ方面もなかなかのものだよ」

「どれもこれも実生活には何の役にも立たないスキルだけだな」

「……まあ、それはさておき。この映画って戦争映画の皮をかぶってるけど、実は同性愛をテーマにした映画でもあるんだよね」

「へー、そうなんだ。そういえばこの曲、なんだか暖かいけど……少し切ないような感じもするね」

コーヒーがくるまでの間、私たちは無言で戦メリを聞いていた。

言葉など必要ない。ただ何も考えずに、このひとときを全身で味わっていたかった。

「どうぞ」

それほど待たずにコーヒーが運ばれてきた。なんともいえない、いい香りが立ち上ってくる。

「いただきます」

味を確かめるために、まず一口含んでみる。

若干薄めな印象。でも美味しい。少し酸味が強いけど、不快なほどじゃない。舌先でしばらくもて遊んでから、ごくりと飲み込む。すっきりとした後味が広がるのがわかる。

とても美味しい。

すごく美味しい。

これまで飲んだことのある、どんなコーヒーともレベルが違う。いや、そんなものと比較するのは、このコーヒーに失礼じゃないだろうか。

「これ、なんか凄い」

「でしょでしょ？」

満足そうな笑顔で、こなたが解説を始める。

「このブレンドの粉はね、ロバーツなんだ」

「ロバーツ？」

「そそ。ロバーツ・コーヒーのスペシャルブレンド。フィンランドのコーヒーチェーンなんだよね」

「へえ、フィンランドって、コーヒーの栽培もやってるんだ？」

「いや、お約束のボケはいいから。熱帯の植物があんな寒いところで育つわけないじゃん」

苦笑いを浮かべるこなた。結構めずらしいかもしれない。

「ブレンドって言うんだけど、複数のコーヒー豆を混ぜることで、さらにいろんなバリエーションが生まれるんだよ。今飲んでいるのもそのひとつ」

「ああ、そういやそうか。まさに字の通り『ブレンド』っていうわけね。でも、なんでフィンランドなわけ？」

「あの国が一人当たりのコーヒー消費世界一ってのは知ってるかな？　そこでスタバやドトールも寄せ付けない一番人気のコーヒーがこれ。そういうわけだから、不味いわけないよね」

「なるほど。確かにすごく飲みやすい。ひよつとして、薄めになっているのはそのためか」

「そだねー。あまり濃いと何杯も飲めないかも」

そんなことを言いながらコーヒークップを舐めていると、こなたが何かを思い出したらしい。今までうつとりと閉じていた目をぱちりと見開く。碧色の瞳を真正面から見据えるような格好になり、少しばかり私はどぎまぎとってしまう。

「そういえばさー、フィンランドと言えばムーミンだよな」

「そうなのか？」

あまりにも遠い国の話題だからだろうか。どうにもイメージがわいてこない。

「かがみって、意外に物を知らないねー。ムーミンの原作者、トーベ・ヤンソンはフィンランドの人なんだ。もともとは第二次大戦の時の風刺漫画としてはじまったんだよ」

「それは初耳だわ。でも確かにムーミンって、童話らしからぬ醒めた感じがあるかもね」

「童話と言えば、そこにもムーミンの絵本が何冊かあるよ」

「え、マジですか」

視線をこなたの指差すほうに向ける。私たちの座った席のすぐ脇に、小さな本棚があつらえてられていて、様々な本たちが無造作に突っ込まれていた。

私は席を立つと、そろそろとその本棚に近寄った。もちろんそれ

はムーミンの絵本を探すための行動だったが、その前に興味深いタイトルに目を引かれてしまう。簡潔な、見なれない二文字の熟語で構成された表題の単行本に。

そのくたびれた本を手にとってみる。いかにもという感じの、けばけばしい表紙が目飛び込んでくる。とりあえずそれは無視して中を開く。それが間違いだった。やばい、どうしよう。ページをめくる手が止まらない。

「かがみ、かがみつてば」

「え……あ、ごめん」

呆れかえったようなこなたの声に我に返ると、すでに十数ページは読んでしまっていた。棚に戻そうと思ったが、どうにも先のストーリーが気になってしかたがない。

「マスターに断れば、貸してもらえるよ」

「ほんとに?」

「ホント」

「それじゃあ……お願いできますか、マスター」

後半の発言は店のマスターに対するものである。果たして彼は、例によって無言の頷きで許可をくれた。

「ありがとうございます」

私は軽く頭を下げながら一旦席に戻ると、その本を鞆の奥深くに、まるで百カラットのダイヤモンドでも取り扱うような気分でしまい込んだ。

「『征途』……か」

久しぶりに宝物を掘り当てたような、いい気持ちだった。今夜は楽しいひと時を過ごせそうだ、と思う。それは限りなく確信に近い予感だった。

「ほら、これだよ」

さすがに業を煮やしたのだろうか、こなたがありかを教えてくれ

た。サイズが他の単行本や文庫本と比べてかなり大きい。いやまあ、絵本なのだからむしろ当然か。

手にとって表紙を見る。アニメで見慣れた絵柄とはだいぶ違う。なんだか土俗的で、おどろおどろしいイメージだ。おまけに字が読めない。英語とも違う横文字が散りばめられている。

「これ、フィンランド語なのかな」

「それはね、スウェーデン語」

「スウェーデン語？ だって、原作者はフィンランドの人って言うてなかったっけ」

「あの国の人口の一割はスウェーデン語を話すんだって。隣がスウェーデンだしね。原作の人もそのひとりってわけ。噂によると、ムーミンにあこがれてフィンランド語を習いだしてから、実は原書がスウェーデン語だって知って慌てる人が時々いるとかいないとか」

「それはなんとも悲惨ね。あ、ムーミンと言えば、あのマスター、なんとなくスナフキンって感じじゃない？」

「ほほー、かがみんはスナフキンの嫁、と？」

「いい加減、そっち方面の話題から離れんかつ」

「じゃあさしずめ私はムーミンで、かがみはフローレンだね」

「なんでよ」

「だって、かがみは私の嫁じゃーん？」

「……はいはい」

得意げに宣言するあなたに、呆れかえった私はつい生返事を返してしまふ。

だが次の瞬間、突如として私の脳内の一部が反逆を起こした

『ただいまー。今日も疲れたな』

『お帰り、かがみ。ご飯、お風呂、それともわ・た・し？』

『いやさあ、そういう冗談はせめて相手の目を見て言わないか』

スーツの上着をハンガーに引っかけると、私はこなたの頭を両手でがしつと掴んで、無理やりこちらに振り向かせようとする。

『PCの画面を真剣に見つめながらそんなこと言っても、説得力ゼロだっつーの』

『ちょ、ちょっと待ってよ。いま重大な局面を迎えてるんだって。ボスの逆襲で、今にもパーティが全滅しそうなんだからっ！』

悲痛な声で窮状を訴えるこなた。それとほぼ同時に、どこからともなく黄色い悲鳴が沸き上がるのが聞こえた。

『こなたママ、後ろから何やってんの！ この状況で味方の下着盗んでる場合じゃないでしょ！！』

『シーフに戦闘までは期待してないけど、せめてポーション使って回復するくらいの機転、利かせてよっ！』

私たちの愛しい娘たちが、奥の部屋から転がるように飛び出してくるなり、こなたに向かって文句を言い始める。

『ちょ、おま。子どもたちまで巻き込んでネットゲ三昧かつ！』

頭を抱えたくなるほどの惨状。ようやく今日の激務を終えて我が家にたどり着いたというのに、まったくこいつらときたら。

『かがみー、助けてよー！。このままじゃ私まで死んじゃう。せめて死体だけでも教会に連れて行ってくれなきゃ、復活も出来ないよー！』

『かがみママー、助けてー』

『お願い、かがみママ。愛してるからっ』

しかも代わる代わる懇願してくるじゃないか。

『ああつ、もうっ！』

髪をかきむしりたくなるような気分を我慢しながら、私はタイトスカートのポケットから携帯端末を取り出す。

『それで、今どこなの？ これから助けに行くから、三人ともちょっと待ってなさいっ』

『さすがはかがみママ!!!』
狂喜する三人の歓声が、十五年のローンを残した我が家いっぱい
に響き渡った

「どつたの、かがみん？」

「え……い、いや別に。なんでもない」

自分でも驚くほどの盛大なため息が出てしまう。

「まったく、何考えてるんだ、自分。私たちは女同士だぞ。ありえん
つ。」

そう言い聞かせることで、妙な思考を切って捨てた。

しかし、心のどこかで鈍い痛みを感じている事実までは、消し去
ることができなかった。

帰り際に私は、出入口をくぐったところで振り返る。ドアの脇に
真ちゅう製の小さなプレートがはめ込まれているのに気づいた。そ
れには小さく『地球の緑の丘』と書かれている。おそらくそれが店
の名前なのだろう。確かハイインラインの作品に同じ名前のがあつた
と思い出す。あの店の本棚にはかなり古典的なSF小説も含まれて
いたし、マスターがそういうセンスの持ち主だとしても不思議はな
い。

だが今の私の胸中を支配していたのは、まったく別の疑問だった。

なぜこなたは、この店に私を連れて来たのだろうか。ただ美味し
いコーヒーを振舞うためだったのだろうか、それとも何か別の意図

があつたのか。あいつの後ろ姿を見ながら、何度その質問を発しようと思ひかけたことだろう。

だが結局、私はそれをぶつける事ができなかった。その答えは、何かとてつもなく怖ろしい結果を招くだろう、と思う。それは限りなく確信に近い予感だった。

第二話・フレンド（後書き）

お読みくださいますありがとうございます。

第三話「エスプレッソ」は4月5日掲載の予定です。

第三話・エスプレッソ（前書き）

今回は、桜庭ひかる先生の視点でお送りいたします。

第三話：エスプレッソ

時たまこうやって、二人きりでふらりと喫茶店に出かけることがある。

誘うのは、決まって彼女の方からだ。

そんな時の彼女の口はひどく重い。

大抵はただエスプレッソを飲みながら、もの思いにふけているだけ。

だから私は、隣でひたすら沈黙する。

おそらくは遠い昔のことでも思い出しているのだろうか。

本来ならここに座っていたであろう、あの娘のことを。

もしかしたら、たしなめるべきなのかもしれない。

彼女に最も近い存在である、この私が。

しかし私に、そんな資格はない。

恥、あるいは後ろめたさ。

そんな言葉の意味を知っているから。

だから私は、隣でひたすら沈黙する。

これが私に行える唯一の贖罪の方法なのだ。

そんな風に自分の心さえも偽る呪文を秘かに唱えながら。

カランコロン、という軽やかなベルの音が聞こえたのでドアの方に目を向けると、ちょうど一人の少女が店に入ってきたのが見えた。「ん、柎じゃないか。奇遇だな」

「あれ、桜庭先生？」

柎かがみ。私が担任を勤めるクラスの生徒の一人だった。

控えめにいっても、彼女はかなりの美少女の部類に入るだろう。背は高すぎず低からず、総合的なプロポーションも水準以上。後ろで二つにまとめた、枝毛一本存在しないのではないかと思わせる長くつややかな髪。整った顔立ちに気の強さを表す、ややつり目気味の瞳。おまけに成績優秀で面倒見もなかなかいいとくれば、これはもう放っておけという方が無理というものだろう、普通なら。

「なんだ。今日はお前の嫁はいつしよじゃないのか」

「いやあ、こなたは今日はバイトで……って、誰が嫁ですか、誰が
っ」

唯一にして最大の障害は、彼女にはすでに想い人がいて、それをクラスの、いや最近では学校の生徒の大半が認識している、という単純な事実だった。ただしその『大半』の中に、当の本人たちは含まれていない。そのため往々にして出来の悪いコメディでも眺めているような気分になることもしばしばだ。

「私は別に泉のことだとはひとことも言っていないんだがな」

「ぐっ……」

言葉に詰まった柎を救ったのは、私の隣に座っていた妙齡の女性の一言だった。

「まあまあ、桜庭先生。あんまり生徒をいじめちゃ可愛そうですよ」

「それじゃまるで、私が柎のことを目の敵にしているみたいじゃないか、ふゆき」

「あら、違っただんですか？」

「違う」と抗議の意味を込めて、私は顔をしかめて見せた。

だがふゆきはそれを軽く無視し、柎に笑いかける。そこには先ほどまでの影の欠片もない。

「とまあ、悪気はない、と桜庭先生は言っているみたいですよ。だから許してあげてね」

「はあ、わかりました。ええと確か、うちの高校の養護の先生ですよね？」

「彼女は天原ふゆき。我が陵桜学園の保健室に咲き誇る一輪の薔薇とはこいつのことだ」

「なんですか、その出来の悪い二つ名は「ぶつ、とふゆきが小さく嘔き出した。

それにしても、こんなところで柎と出くわすとは。これはいい機会かもしれない。

「しかしお前、よく知ってたな。こんな場末の喫茶店」

「ええまあ。たまに本を読みにくるんですよ。ここはコーヒーも美味しいし、とても落ち着くので。もつとも今日は、借りていた本を返しに來ただけですけどね」

そういうと彼女は、手にした一冊の単行本を差し出した。

「ほう、佐藤大輔か。なかなかいい趣味してるな」

「知ってるんですか、この本の作家」
「よく知ってるぞ。一時期ハマったからな。主要な本は全部持っている」

「それは凄いですね。ここには『征途』しかないので、他の本を買おうかどうか迷っていたところなんです。何かお勧めの本はありますか？」

「そうだな。架空戦記が好きなら『侵攻作戦パシフィック・ス

トーム』、SF要素に惹かれたなら『遙かなる星』、現代社会に対する問題提起を読みたいのなら『地球連邦の興亡』。そんなところか」

「いろいろ書いてるんですね。それにしても、桜庭先生がこの手の本を読むなんて、なんか意外かも」

「若い頃に仮想戦記がブームになってな。結構いろいろ読んだぞ。まあ、若気の至りって奴だ」

「他にはどんな本があったんですか？」

「うーん、そうだな……」

一瞬だけ、過去に読み漁った本たちを思い浮かべる。何十、何百という本のタイトルが脳裏に現われては消えた。

「私が勧めるとしたら、佐藤大輔のほかには谷甲州の『覇者の戦塵』シリーズと、あとは川又千秋の『ラバウル烈風空戦録』あたりかな。それと横山信義という作家の名前は覚えておいた方がいい」

「谷甲州って、確か『航空宇宙軍史』を書いていた方ですよな」

「そうだ。あれを読んだのか。お前、実はマニアだな」

「いやまあ、父がそういう系統の本が好きなので、いつの間にか」

どこか照れくさそうな表情を浮かべながら柊が答える。どうやら彼女はお父さんっ子らしい。

「そうか。お前の父上とはいい酒が飲めそうだ。それはさておき、『航空宇宙軍史』を読んだのなら、『軌道傭兵』シリーズはどうだ？」

「それはまだ読んでいません。どんな内容なんですか？」

「近未来の宇宙開発をテーマにしたハードSFだ。主人公のハスミ大佐は『覇者の戦塵』にも登場するから、読んでおいて損はない」
いつの間にか私は夢中になりかけていた。これから語るつもりの本題にむけての前置き、という側面も確かにある。だが何より、久しぶりにこの手の話題を楽しめる相手を見つけたことが、私にはうれしくて仕方がなかったのだ。

「ところでお前、ここのエスプレッソは飲んだことあるか？」

「ないですね。ブレンドとかは確かに美味しかったです」

「おいおい、エスプレッソと普通のコーヒーをいっしょにするな」
また始まった、という表情をふゆきが浮かべるが、とりあえずそれは見なかったことにする。

「そもそもドリッポ式のコffeeとエスプレッソでは成分からして異なる。製法がまるで違うからな。エスプレッソは専用のマシンを使つて、高圧をかけてドリッポ式より短時間に抽出を行う。9気圧が理想、と言われているようだが」

「ああ、あの機械のことですね」

「そうだ」と、柊の視線の先にあるものを見て、私は軽く同意する。
「コーヒー豆には何百種類もの成分が含まれているが、高圧がかか
るから多く溶けだすという成分もあれば、短時間のため余り溶け出
さないという成分もある。だからたとえ同じ豆を使つたとしても、
ドリッポ式のコffeeとエスプレッソでは、単純に同じ味になるわ
けじゃない」

「なるほど、言われてみればもつともですね」

「それにドリッポコーヒー一杯分のコーヒー豆で作るエスプレッソ
は、普通のそれよりずっと少ない。高圧をかけるから、無理やり抽
出すると雑味成分まで溶け出してしまふんだ。だからエスプレッソ
を飲むにはデミタスという専用のカップを使う。ちなみにデミタス
とはフランス語で『小さなカップ』という意味だ」

私は先ほどから手にしていたノンノンの絵が描かれたデミタスを
示してみせる。

「というわけで、お前も一杯どうぞ。そのくらいなら奢るぞ」

「そういうことなら、喜んで。まだ少しくらい時間はありますから」
笑いながら柊は、ふゆきと反対側のカウンター席に腰を下ろした。

「だがエスプレッソだけ、というのはいまひとつかな。お前、何か
ケーキでも頼め」

「あれ、ここってケーキもあるんですか？」

「出前できるぞ。ほら、メニュー」

「でも……なあ」

身をよじって柊が抵抗する。

「カロリーが心配ですか？」

微笑をたたえながら、ふゆきが口をはさんでくる。

「ええ、まあ」

「強いコーヒーは新陳代謝を活発にするんですよ。ケーキ一切れくらいならそれほど問題にはならないでしょう」

「どうやら今度はふゆきのターンのようだ。コーヒー、ということこそをエスプレッソ、と突っ込みたい誘惑にかろうじて耐える。」

「大体、今の若い人はやせ過ぎ」

やや眉をひそめながら、ふゆきはなおも続ける。念のために忠告しておく、こういう時のふゆきに決して逆らってはならない。ひとこと反論しようものなら、それこそ百倍、千倍になって返ってくるからだ。

「気持ちはわからないでもないですが、でも健康を害してしまったり、元も子もありませんよ」

あくまで真摯な姿勢を崩さずに、ふゆきはさらに言いつのる。無論そこには一片の悪意もない。だからこそ始末に負えないわけであるが。

「それに、相手の方も悲しむでしょう？」

「ですから別に、こなたと私は何も……あ」

しまった、という風情で柊が自分の口を手で押さえるがもう遅い。肩を震わせて、ふゆきは笑いを堪えている。こういうコメディタッチな空気はどうにも苦手だ。背中がむずがゆくなる。

「そういえば、ムーミンの作者の人がフィンランドの人だって、こ

ここで初めて知ったんですね」

ミーの絵柄のデミタスを興味深そうに眺めていた柊が、ふとそんな事をつぶやいた。

「ムーミンか。その作者のトーベ・ヤンソンが同性愛者だったって知ってるか？」

「え……。そ、そうなんですか？」

虚を突かれた、という表情を柊が浮かべる。そのような話が私から飛び出すとは予想していなかったのだろう。

だが私には、この絶好の機会を逃すつもりはさらさらなかった。

「ヤンソンは、人生の大半をトゥーリツキ・ピエティラというパートナーと過ごした。ムーミンという作品自体、この二人の合作という側面もあるそうだ」

「へええ、それは全然知りませんでした」

「たとえばこのノンノンの絵も、画家としても一流だった。ピエティラがデザインしたのかもな」

「ノンノン？」

まるで幼子のように柊が小首を傾げる。

「ああ、お前の世代はフローレン、だったか。ムーミンの恋人は、私たちの頃はノンノン、という名前だったんだ。な、ふゆき？」

「ええ、もちろんフローレンですとも」

こ、この裏切者っ。私はふゆきを思い切り睨みつけたが、彼女はしれっと微笑を浮かべるだけだった。

さて、前置きはこのくらいにして、そろそろ本題に入るとしよう。「ところでお前、単刀直入に聞くが、泉のことをどう思っているんだ」

「どっつて……。そりゃ、ただの友達。友達ですけど」

「そうか？ とてもそうは見えないがな」

頬を赤らめ、視線をはずす。困惑がありありと見て取れる態度だった。

「ただの友達以上の好意を抱いていることに気づいてしまい、その事実には戸惑っている。そういう風に見えると言ったら？」

「バカバカしい。ありえませんが、そんなこと」

「どうかな」と私。

「だって、変じゃないですか。そんな、女の子同士でなんて」

「そりゃかなりの差別的発言だな」

「仮に、もし仮に私がそういう感情を持っていたとしても、こなたもそう思ってるとは限らないじゃないですか」

「本人に聞いてみたのか」

「聞けるわけじゃないですよ、そんなことっ」

「しだいに柁の語気が強まっていく。」

「そんなこと、か」

努めて平静を装ったつもりだが、果たしてうまくいっているだろうか。まあ今の柁の精神状態では、気取られる恐れはなさそうだが「もし不用意にそんなことを口走ったら嫌われるかも。友達ですらいらなくなるかも。それなら今のままの方がまし。たとえ自分の心押し殺してでも。そんなところか」

「先生に何がわかるっていうんですかっ！」

激昂した柁がついに悲鳴を上げ、席から弾かれるように立ち上がる。だがすぐに我に返ったらしい。頭を下げた見せた。

「……すみません、つい興奮してしまっただけ」

しかたがない、この手だけは使いたくなかったが。

「ひとつ昔話を聞かせてやろう。つまらない話だが」

私は居住まいを正すと、柁に向き直った。普段見せたことのない私の態度に、柁が全身で緊張するのがわかる。

「昔あるところに、一組のカップルがいた。とても仲睦まじい二人だった。まるで生まれる前からそうなることが約束されていたかの

ように。周囲の目も気にせずにな。

一人は都会からやってきた少々変わった娘。もう一人は土地の有
力者の血を引く気丈な少女。生まれも育ちもまるで異なる二人が、
いったいどんな心の交流を重ねていたのかはわからない。古くから
の因習に縛られた土地に生まれ育った少女にとって、異郷からやつ
てきたその娘の存在は、ある種の救いだったのかもな。

だがその娘は不治の病に倒れた。

もちろん医師たちはできる限りの手を尽くしてくれた。強い副作
用のある薬。リハビリテーション。遂には研究途上の新薬まで投入
して。だがしかし、しだいに衰えていく娘のことを、救うことはで
きなかった。

それでも少女だけは娘を支え続けた。ある時は、白い目を向ける
人々から娘を護る盾となった。またある時は、懸命に歩行訓練を続
ける娘の杖となった。やがて病状が進行して娘が歩けなくなると、
ベッドの傍らで自分の見た外の様子を話し続けた。都会育ちの娘に
とって、その土地の豊かな自然は何よりの心の慰めだったからだ。

そしてある年の冬の12月24日。娘はこの世を去った。それは
最悪のクリスマスプレゼント。少女の心には思い出と、決して癒え
ない傷だけが残った。

だがそんな彼女の心の隙間に、まんまと入り込んだ奴がいた。今
でもそいつらは、煮え切らない関係をダラダラと続けている。

そんな、つまらない話だ」

そういい終えてから私は、ふゆきの方にちらりと視線を走らせた。しかし彼女は何の反応も示さず、ただ黙って空っぽのデミタスを見つめている。事情を察したらしい柊が息を呑む気配を、私は肌だけで感じていた。

悲劇的な話を持ち出して相手の道義心に訴えかける。正面切つて反論できる者などめつたに存在しない。まったく、説得の外道じゃないか。

だがここで手を緩めるわけにはいかない。

「答えはお前の心の中にあるはず。逃げるな、まっすぐ向き合え。どっちつかずの態度は時として残酷だぞ」

「でも そんな、私……」

動揺を隠し切れない柊に対し、私はさらにたたみかける。

「後悔しないように、よくよく考えてみることだ。時間はたっぷりある。生きてさえいれば」

彼女は完全に沈黙し、一言も反論するそぶりを見せようとはしなかった。

柊が店を後にしてから、私はもう一杯エスプレッソを頼んだ。それを待つている間のことだ。

「約束してくれますか？ 決して私より先には死なない、と」
ぽつり、とふゆきがつぶやいた。

「たとえば私たちがこの先、別々の道を歩くことになったとしても」
どこか思いつめたような表情を浮かべながら、彼女が言葉を重ね

る。

「いいよ。約束する」

他になんと答えられるだろうか。誰か教えて欲しいものだ。なんだったら、この席に座る権利をくれてやってもいい。

「ありがとう、ひかるちゃん」

かろうじて微笑らしきものを浮かべながら、か細い声で彼女は私に礼を言った。どんな罵詈雑言よりも堪える一言だった。いっそ罵ってくれたほうが、まだ救われるかも知れない。

最後のエスプレッソは、どれほど砂糖を入れても、一向に甘くなる気配はなかった。

第三話：エスプレッソ（後書き）

お読みくださいますありがとうございます。

第四話「ケニアアラビカ」は4月12日掲載の予定です。

それと、このシリーズは全六話になるはずですが。

もうしばらくおつきあいくださいませ。

第四話・ケニアアラビカ（前書き）

今回は、みゆきさん視点でお送りいたします。

それでは、お楽しみくださいませ。

第四話：ケニアアラビカ

重大な決意を胸に秘め、私はひとりの少女と対峙しています。

目の前の彼女は、少々困ったような顔をされていらっしやいます。あらかじめ私がお願いして、わざわざ人気のない、放課後の校舎の屋上にご足労いただいたのですから、もし困惑されていたとしても無理からぬことでしょう。

右手から差し込む西日に照らされて、彼女の半身が紅く染まっています。

私のことを見つめる碧色の瞳に、そのまま射抜かれて身動きが取れなくなりそうです。

ちょうどその時、柔らかな風が殺風景なコンクリートの屋上を吹きぬけ、

私たちの髪に悪戯を仕掛けていきます。

すると彼女の長くて蒼い髪がいつになくきらめいて、それはそれは幻想的な光景に感じられました。

それにしても、こういうことは本当に不慣れで。

これは女性として、少々恥ずかしいことかもしれませぬ。

ネットでリサーチしたところによると、

女性に人気のシチュエーションは一番が夜景、

そして二番がこの夕焼けの景色だそうです。

なるほど確かに、実際にその状況に身を置いてみれば、

その意見も大いにうなずけるといふものですね。

ともすれば雰囲気にも飲まれてしまいそんな心を奮い立たせ、私は彼女の瞳を真正面から見据えます。

「なんかさー、まるでこれから、みゆきさんに告白でもされそうなシチュだよね」

目を細め、口の端に小さな笑みを浮かべながら、そんなことをおっしゃいます。

「さすがは泉さんですね。察しがよくて助かります」

「……え？」

思いがけない私の答えに驚かれたのでしょうか。彼女の目が大きく見開かれます。

最高の舞台。

最高のシナリオ。

最高のタイミング。

人事は尽くしました。

神さま、仏さま、いえ、この際誰でもかまいません。

願わくば、

ほんの少しの勇気と、

たくさんのお幸運をくださいませんかでしょうか。

「今日は私、泉さんに交際を申し込もうと思ひまして、こちらにお呼び立てしてしまいました」

私の恩人であり、

よきライバルであり、
なにより最高の親友でもある、
かがみさん……柊かがみさんのために。

「ねえ、そもそもコーヒーって、いつ頃から飲むようになったのかな」

くるくると空のコーヒーカップを器用に回しながら、かがみさんがそんな疑問を口にしました。

「そうですね……」

ほんの少しだけ記憶の扉を開きます。コーヒー、起源、歴史。そんなキーワードから、次々とイメージが湧き出してくるのを私は感じます。

「焙煎器具が登場するのは、十三世紀のイスラム世界だそうです」
この喫茶店『地球の緑の丘』で、かがみさんと日曜のひと時を一緒にするようになってから、どのくらいたちますか。今では私にとつてなくてはならない、とても大切なひと時となりました。

「欧州には十六世紀末、地中海経由で交易商人の手によって、オスマン帝国から伝わったと考えられています。一六〇二年にはローマに持ち込まれた、との記録がありますね。このときすでに“Coffee”と呼ばれていたそうですよ。」

初め、コーヒーは健康に悪いなどと言われ、敬遠されていたそうです。しかし一六〇五年、当時のローマ教皇であったクレメンス八世が、コーヒーに洗礼を施しキリスト教徒も飲用することを認めたという話があります。これは『コーヒー洗礼』と呼ばれているそうです。それをきっかけに、次第に広まっていったそうです」

「他の国ではどうだったのかな」

「一六五〇年には英国に上陸。一七〇〇年には数千軒のコーヒー・ハウスがあったと伝えられています。コーヒー・ハウスは上流階級

の人々の社交場となり、英国王立科学院もここから発祥したそうです。『数学者はコーヒーを定理に変える機械だ』という言葉を残した数学者までいらっしやるのか」

「ずいぶんと楽しげに、かがみさんが笑い出しました。」

「それはまた、ずいぶんと極端な意見ね。でも英国は紅茶ってイメージがあるんだけど」

「そうですね。英国では十八世紀に紅茶の飲用が広まり、コーヒー・ハウスはしだいに衰退していくことになりました。衰退といえば、プロイセン王国では一七七七年にフリードリッヒ二世がコーヒー禁止令を出していますね」

「それって“フリードリッヒ・ディア・グロッツェ”、ね？」

今度は意味ありげな微笑を、かがみさんが浮かべています。

「ええ、その通りです」

こういう反応をされると、私も知らず知らずのうちに顔がほころんでしまいますね。

「“フリードリッヒ・ディア・グロッツェ”ことフリードリッヒ大王は、一般にはプロイセン王国の立場を揺るぎないものにした名君として知られています。しかしこの名は、ナチスドイツ時代の未製戦艦H39に付けられる予定だったとも言われ、また佐藤大輔の名作『レッドサン・ブラッククロス』ではインド洋の通商破壊作戦に登場し、日英海軍を苦境に陥れることになりました」

本当に、かがみさんはこういう遊びがお好きで。ですから二人きりのときは、たとえ世間話をしていても気が抜けません。もっとも、こんな遊びでしたら私も大歓迎なのですが。

……いけませんね。あやうく元の話題を忘れてしまうところでした。

「話を元に戻しますが……コーヒー禁止令は海外貿易の収支や国内産業の育成などが背景にあると考えられています。同時にビール推奨令が出されていることから、この説には一定の説得力があると

思います」

「でも、コーヒーは屈しなかった」

「はい。このような弾圧にもかかわらず、コーヒーは着実に欧州大陸に根付いていきました。フランス革命はパリのカフェから始まった、と断言する方もいらっしやるくらいです」

「いわばコーヒーは欧州史の影の功労者ってわけね。そういえば、みゆきはコーヒーの銘柄って、こだわりとかある方なの？ 私はモカの味くらいしか知らないんだけど」

「日本ではブルーマウンテン、キリマンジャロ、モカといったところが定番ですが、私はケニアの豆が好みですね」

「ケニア？ 聞いたことないわね」

小首を傾げるかがみさん。こんな時の彼女は、まるで幼子のように。

「ええ。こちらでは酸味が強い豆はあまり人気がないのですが、あれはあれでなかなか捨てがたいものです。中学の頃にウィーンのカフェで出会った、ケニア豆の不思議な味はいまだに忘れられません」とすると今度は、かがみさんが軽く私のことを睨みつけてきました。「いかにもブルジョアジ的な発言ね」

「かも知れません」
「なんだか『万国の労働者よ、団結せよ』って叫びたい気分になってきたわ」

「では私は『人民にはパンとサーカスを与えよ』と唱えましょう」
澄ました顔を維持できたのもここまで。ほとんど同時に、私たちは噴き出してしまいました。

こんな危ういやり取りも、諧謔という名のオブラートに包んで楽しむことさえできる。いつまでもこんな時間が続けばいいのに。そう思えてなりません。

本当に……本当に、残念です。

「そうそう、フィンランドって、国民一人当たりのコーヒー豆の消費量が世界一なんだってね」

「そうなんですか。勉強になります」

「フィンランドと言えばムーミンだけど。あれの原作って、アニメと違ってちよつと怖い感じがするよね。そもそも話の内容も結構醒めた感じのがするのがあるし」

「童話には、発表された当時と現在では、似ても似つかない内容のものも少なくありませんよ」

「へえ、そうなんだ。例えば？」

「そうですね。グリム童話の『白雪姫』などはいい例だと思います。わずかに居住まいを正しながら、私は続けます。今日の本題を切り出す機会をうかがいながら。」

「よく知られている、毒リンゴを食べて死んでしまった白雪姫が王子さまのキスで目覚めるシーン。あれはディズニー映画による改変なんです」

「マジですか。そりゃ初耳だわ」

「原作では、棺を担いでいた王子の家来が、やつあたりで棺から白雪姫を出し殴りつけてしまう。すると白雪姫は喉に詰まっていたリンゴのかけらを吐き出し、息を吹き返す。そういう内容でした」

「それはいかにも盛り上がり欠けるわね」

「他にも初版では、白雪姫を殺そうとしたのは継母ではなく実の母だったとか、七人のこびとは七人の人殺しだったとか、それはもう驚くような内容で。いくつもの改変を経て現代に伝えられているんです」

「なるほどねー。でも棺バージョンのお話じゃ、『涼宮ハルヒの憂鬱』の伏線も成立しないわね」

「『涼宮ハルヒの憂鬱』……ですか？」

「ああ、みゆきはあんまりラノベは読まないか。五百万部以上を売り上げた、と言われるモンスタータイトルよ。名前くらいは聞いたことあるでしょ?」

「ええ、まあ。泉さんとかがみさんの会話でも時々登場しますし」
『泉さん』という言葉が発した瞬間、かがみさんの顔がわずかに歪んだのを、私は見逃しませんでした。

「このお話では、クライマックスで異世界に閉じ込められた主人公とヒロインが、そこから脱出する方法としてキスするわけ。で、それを暗示するために『白雪姫』が何度も持ち出されるの」

「なるほど、そういうわけでしたか」

「確か最初に『白雪姫』の話を振ってきたのが朝比奈みくるというキャラクターで、これがもうロリで巨乳、おまけにドジっ娘というそれはもうわかり易い記号の固まりで……」

「どういうわけか、かがみさんの視線が私の胸に注がれています。」

「あ、あの、何か……?」

反射的に腕で胸元を隠しながら、私はかがみさんを正気に戻すべく質問を發します。

「え……あ、うん」

視線をそらし、言葉を濁します。そんなに言いにくいことなのでしょうか。

「その、なんか羨ましいなと思って」

顔を紅らめながら、そんなことをおっしゃいます。

「胸が大きいことが、でしょうか」

「まあ、そういうこと、かな」

苦笑いを浮かべるかがみさん。

「大きくても困ることもあるんですよ?」

「そういうものなのかな。たとえば、足元が見えないとか?」

「確かにそういう不都合もありますが……なんと言いますか、私は大抵の男性には『胸の大きな女の子』と認識、分類されてしまうようなのです」

「そりゃまあ、そうでしょうね」

「ですから、中身で評価されることは、あまりありませんね。そういう人たちにとって、私が何を考え、どんなことを感じ、そしてどのような能力を持っているのか。そういうのは、どうでもいいことなんです、きつと」

「あー、それ、なんか寂しい話だね。みゆきの魅力はそんなもんじやないのに」

「全ての事象は相対的。人によって、見方によって、立場によって変わるものです」

「少しばかり強引な展開でしょうか。でも、かがみさんが弱気になっっている今こそ、ひとつの機会であるはず。」

「困難を回避し、偽りの平和を望む人もいらっしやれば、困難な道であっても、共に手を携えて歩むことを望む人もいらっしやるのではないでしょうか」

それを聞いたかがみさんの態度が一変しました。目をすうつと細めると、まるで絶対零度のような冷ややかな声を私に投げかけます。

「何か言いたそうね」

「もちろん、泉さんのことです」

ほうつ。かがみさんが大きく息を吐き出します。

「いつから？」

「先日の試験で、かがみさんの学年順位が大幅に下がったときに。」

あのとき、かがみさんは、つかさんに付き合ったから自分の勉強がでなかつたとおっしゃっていましたが、それはいつものことですよね」

「それで」と、固い声でかがみさんが続きを促します。

「では原因は何か。そう思いながら、かがみさんの行動に少しばかり注意をばらうようになったのです。すると、今まで見えていなかったものが、しだいに見えてくるようになります。かがみさんと、

それから泉さんに対しても。このくらいでよろしいですか？」

「ただの推測に過ぎないわ」

「おっしゃる通りです、ここまでは」

座っているはずなのに、膝がガクガクと震えてしまいます。でももう、後戻りはできません。私はあるったけの勇気を振り絞り、次の言葉を口にしました。

「それで、お恥ずかしながら、実は先日、泉さんに交際の申し込みをしてみました」

案の定と言っべきでしょうか。かがみさんの目が点になります。

「……えっと、ごめん、よく聞こえなかった。悪いけどもう一度お願い」

「ですから先日、泉さんに私と交際していただけるようお願いをしてみた、ということですよ」

「ふーん、そうなんだ。って、はあああああつ？」

「もちろん、丁重にお断りさせていただきました。残念なことに」

「そっか。はははっ。でもあいつも、ずいぶんと勿体無いことするわね。よりもよって、み、みゆきみたいな完璧超人を振るなんて」

ああ、かがみさん。その反応、あまりにもわかり易すぎます。

「泉さんには、密かに想いを寄せている人がいらっしやるのだそうです」

「へえ、そう。そう、なんだ」

「それで、泉さんが「やめてやめてやめてっ。聞きたくない、そんな話っ！」

頑強な、いえ、頑迷なまでの拒絶の態度を見せるかがみさん。

「いいえ、聞いてください。聞いてもらわなければ困ります」

一呼吸置いてから、私は軽く目をつむり、泉さんの言葉をひとつひとつ脳裏に浮かべます。万にひとつでも間違いないなど許されません。一語一句に至るまで、可能な限り正確に伝えなければ。

「泉さんが想いを寄せるその人とは、

とても気が強くて、
ときどき酷く凶暴で、
でも本当はとても優しく、
ひたすら妹思いで、
それでいて実は寂しがり屋で、
なかなか成績優秀で、
一見万能に見えて、
実は影でものすごい努力をしていて、
でも他人にはそんなことを微塵も感じさせなくて、
なぜか家事は苦手で、
整った顔立ちが愛らしくて、
その藍色の瞳に惑わされて、
すらりとした手足がとても素敵で、
ぴしりと伸びた背筋が凛とした意思を感じさせて、
背丈は自分よりほんの少しだけ高く、
いつも体重を気にしているけど実はウエストは結構細くて、
意外にも充分女性らしさを感じさせる胸で、
ツインテールに整えられた董色の髪で、
オタクな自分のこともわけ隔てなく付き合ってくれる、
……もうこの先は、必要ありませんね？」
ここで言葉を区切ると、私はかがみさんの反応を待ちました。

やがて、かがみさんの瞳にようやく光が戻ってきました。意思と
いう名の光が。

「あのさ、悪いけど用事、思い出しちゃった。ごめん、帰る」
ここで私は、黙ってかがみさんを送り出すべきでした。どうして
こんなことを聞いてしまったのでしょうか。

「ひとつだけ教えてください。どうして泉さん、なんですか？」

「……誰かを好きになるのに理由が必要なのか？」

一瞬だけ不思議そうな表情を浮かべると。

「だったら、あとで考えとく」
笑顔が花を開きました。

一点の曇りもない、満面の笑顔。
それはあたかも、この世の誰もが恋に落ちそうな笑顔でした。
なるほど。

これが人を好きになる、ということなのでしょうね。

たとえどれほど趣向をこらしたとしても。
どれほど策をめぐらせたとしても。

想いの強さにはかなわない。
絆の強さにはかなわない。

そういうことなのでしょう。

ときばきと身支度を整えたかがみさんが、店のドアに手をかけた
所で何かを思いついたらしく、私の方に振り返りました。

「みゆき　ありがとう。そして、ごめんね」

こうして、かがみさんは私の元から足早に去っていきました。
おそらくは、永遠に。

本当に……本当に、残念です。

「コーヒーのお代わり、いかがですか？」

マスターの見事なバリトンで、私はようやく我に返りました。
いたい、どのくらい呆けていたのでしょうか。

「あ、でも。もう、帰りますので」

「御代はいただきません。常連様に対する、ほんの感謝の表明に過ぎませんので」

「わかりました。そういうことでしたら、喜んで」

目の前に置かれた、わずかに湯気の立ち上るコーヒークップ。とても懐かしい、よい香りです。それを手に取ると、私は味を確かめるために一口含みました。

「こ、これは……」

とても酸味の強い、でもそれに負けないくらい苦くて。でもそれは同じ苦味でもまったく嫌味がなく、さらに舌触りもとてもいい。

何よりも、鼻に抜ける香りのなんと上品なことか。

「この香りは、ケニアアラビカのようにも思えますが、でもあれはここまで苦くないはず……ああ、そうか。煎り方に工夫があるのですね」

「よくご覧になりました。確かにケニア産のアラビカ豆ですよ」
マスターは満足そうな笑みを浮かべました。

「深挽きにしたものをフレンチで焙煎してみました。今年の豆には、それが一番合いそうに思えましたので。ちょっとした自身作のつもりです」

「とてもよい出来栄えだと思えます。苦味が強くて最初は驚きましたが、きつい酸味を引き立てていて、すばらしいハーモニーですね
お見事です」

「貴女のようなお客さまに飲んでいただける。こんなことがあるから、この商売は辞められない」

そう言ったところで、急にマスターの顔が悪戯っぽい笑みに代わります。

「もし私が普通の男であれば、さっそく貴女を口説きにかかるつもりでしょう」

「まあ、人の弱みにつけ込むなんて、感心できませんね」

「私ほどの歳になっても、なりふりかまわず手に入れたくなること

もあるものです」

「あらあら、ひよつとして本気ですか？」

「貴女ほどの方がお相手ならば、一時的に自分の性的志向を棚上げしたくもなりますとも」

「過分な評価、恐れ入ります」

心の中で、私はマスターの配慮に感謝しました。おそらく彼は、打ちのめされている私を哀れと思い、意図的に軽い態度を取っているのでしょう。

でもそんな微笑ましいやり取りも、カランコロン、という軽やかなベルの音で遮られてしまいました。

私がドアの方に目を向けると、ちょうどふたりの女性が店に入ってきているところでした。

「おいおい、いつからこの喫茶店は女子高生のたまり場になったんだ？」

「少し落ち着きましょうよ、桜庭先生」

「ご機嫌斜めらしい桜庭先生と、それをなだめる天原先生のお二方でした。」

「で、お前ひとりか。高良」

「ええ、先ほどまでは、かがみさんとご一緒させていただいていたのですが。ですが、あの方は、もう行ってしまわれました。泉さんのところに。私の手の届かないところに」

「……そうか」

短く答えた桜庭先生が振り返ろうとすると、天原先生が肩に手を置き、小さくがぶりを振りました。それに対し桜庭先生は小さくうなずいて答えます。

そこには一言の言葉もありませんでした。でも私には、お二方のやりとりがはつきりと聞こえたのです。

『大丈夫かな、あいつら』

『もちろんですとも。あとは若い二人にまかせましょう』

『ん、そうだな。もう年寄りの出る幕じゃないか』

とても羨ましいですね。

いつかは私も、このような間柄になれるお相手と出会いたいものです。

でもそのためには、もっともっと自分を磨き高めなければ。

「それにしても、お前までこの店にいるとはな。終に教えられたのか」

「その経緯をお話すると少々長くなるのですが」

私は席を立ちながら、お二方に笑みを返します。

「ですからその前に、コーヒーなどがでしよう」

人々の苦しみを癒し、あるいは安らぎを与えてくれる、一杯のコーヒー。

それは人類の至宝。

極上のケニアアラビカ。

本当に……本当に、素敵です。

第四話：ケニアアラビカ（後書き）

お読みくださいますありがとうございます。

第五話「カネフォーラ」は4月19日掲載の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4544g/>

コーヒーブレイク

2010年10月10日18時25分発行